



の同じように熱っぽい動きがあった。思いつくままにあげてみても、アメリカのネオ・ダダイストたち、フランスではヌヴォ・レアリズムやニース派の作家たち、北欧ではコブラなどこれらはいずれも、発生した地の美術館を中心に、世界各国にひろがり、展示されてきている。これらの世界中の動きと、明らかに共通する意識がありながら、日本だけは、ネオ・ダダも九州派も 運動としても、個々の作家の作品としても、みられる場所がない。荒川修作、工藤哲己、河原温、それに桜井にしても、一旦外国にでて、外国で評価されてから、ようやく日本で迎えられるというのが現状である。浮世絵以来のこの恥ずべき無明状態を、折角各県に美術館が建てられはじめたのだから、まず卒業してもらいたいと、私は切に願う。

美術作品は、その時代と環境の状況の反映だから、北九州に現われた動きと、その哲理をまず明らかにすることによって、それを世界中の動きと対決させていくという美術館運営の方法が確立される必要があるだろうし、たかだか限られた期間外国旅行にでかけて、たまたま目にした動きを教条化して、それを作品評価の基準にして恥じない、いうところの「批評」の思想奴隷的状态は排除されなければいけないと思う。これは、作家や作品の交流ということだけではなくて、人間のありようの根元にかかわっているのである。美術についてのこのシニシズムは、即座に排除されなければならない。

「九州派時代のきみの作品はどんなだったかな？」